1969.6.23 明治大学新聞

院生も封鎖に参加

農・工200人がストに

二十日、生田のお山に夕闇が迫る頃、工闘委（工学部闘争委員会）と農闘委（農学部闘争委員会）の合わせて二〇〇名近くのヘル部隊が、アスファルトを踏みしめてデモを繰返した。シュプレヒコールが工学部の近代的なビルにはね返る。午後六時十五分、封鎖に着手した。工学部事務室から運び出したロッカー、机などがたちまち〝トリデ〟と変貌する。トリデというよりも防波堤そのもの。狭い通路が曲がりくねって外から二階ロビーへ通り抜けた。階段にはイスをいい加減に積み上げて、針ガネでがっちりと――。一見もろそうだがびくともしない。バリケードを築いたのは一号館のロビー入口だけなので、七時半には完了した。

八時三十分、〝正門封鎖〟といってもバリ封鎖ではない。鉄の門をしっかりと針ガネでくくったのみである。〝正式〟のバリケードは明日（二十一日）の全共闘結成後という。

十二・三日両日にわたる農学部学生大会は、ようやく「授業ボイコット」を決定した。大学立法には反対、バリストにも反対という典型的ノンポリがそれでも会場の一二〇番教室を超満員にした。そして譲れるところまで譲ったのが〝授業放棄〟であった。「あとは農闘委に結集して下さい」と執行部がいうと、口々に「農闘委ってなんだ」「そこでバリケードを決るんだろう」などと批難の声を上げ、大会が終っても三〇分は立ち去らなかった。だが、二年の全クラスがスト決議と発表するなど、農闘委に結集した学生は質は工学部を上回っているとの評もある。それは例えば「明大の矛盾が農学部に凝縮してるからだ」ともいわれている。

一方、工学部は十七日の学生大会スト権確立以来、授業放棄してきたが、二十日の夕方一号館の一部を封鎖した。翌日の二十一日、登校してきた教授を正門で〝入場阻止〟がなされた。〝バリケードスト突入〟のタテカンを横目でニラム教授も…。午後四時ごろ、副学生部長室も封鎖された。

記念館で行なわれた全共闘結成大会から帰ってきた工・農闘委約五〇人は、一号館の教員控室で夜遅くまで会議を開いた。なお、二〇日に院生の手によって、工学部第三校舎八階の建築計画第一・三研究室もバリ封鎖された。

（Y）

〝4門〟をバリスト

研究室・1号館なども

和泉地区のバリケード封鎖は二十一日午後九時三十分過ぎまでにすべて完了した。

午後八時、本校封鎖を終えた全共闘約二〇〇人は、和泉校舎一号館前に到着。すぐさま各学部別に分かれてバリケードの構築にとりかかった。

正門は政経学部と文学部の約八〇名。商学部の三〇名は二号館前の門。さらに法学部の二〇名は生協横の道路。経営学部の二〇名もグラウンドに通じる立橋の封鎖。一号館ではサークル連合闘争委の五〇名がバリケードを築いている。研究室も数名が封鎖にかかった。

小雨の中を二〇〇名が黙々と動く。椅子を運ぶ音が静寂な校舎に反響してガラガラと大きな音になる。雨にぬれたヘルメットが光を反射して美しい。いわゆる一般学生はまったくいないので、和泉地区全体が全共闘一色にぬりつぶされた感じであった。

それにしてもバリケード造りは手慣れたもの。各事務室のロッカーを押しつけ。椅子と机を積み上げて針金で固定すればできあがりだ。

約一時間半後、和泉に学費闘争以来最大のバリケードが完成したインターを頃ってデモをする学生もいるし、疲れてすわり込む学生もいた。だが、どの顔にも一様にバリケード闘争によせる期待がうかがえる。

その後、全共闘の学生は二〇七番教室に集まり、総括集会を開いて各分担ごとに散って行った。しかし、体育館にはこのような外の様子にまったく関心を示さず、ただ一心にクラブ活動に励げむ学生の一団がいたことも事実である。バリケード越しにまったく対称的なこの二つの面は、それは闘争の二面性ともいうべきもので、当然の現象として見すごされているがそこには何か割り切れないものが多い。

和泉地区は既に十一日から事務室が封鎖されており、この全校舎バリストもほとんどの学生が予想していたことで、それほどの混乱は生じなかったが、民青・体育会を中核とする反バリスト派のまき返しが注目されている。また、全共闘内部におけるセクト間の問題も和泉においてはまだそれほど表面化していないが、今後、闘争が進むにつれておもてに出てくるものと心配されている。

（K）